

巻頭言 — 館長就任にあたって —

日比野克彦（熊本市現代美術館館長）

今の私の活動拠点には、教育研究機関である東京藝術大学（国の施設）と、ルドンや地元の作家など様々なコレクションが基本となっている岐阜県美術館（県の施設）があります。それらと比較すると、熊本市現代美術館は、「熊本市」という市の単位と、「現代美術」という単位、立地的には「街の中心にある」という意味合いがあります。3つの活動拠点はそれぞれの特徴があり、自分の仕事としてはいいバリエーションがあります。私に取り組んでいるアートプロジェクトをあらためてみると、県ではなく、市町村レベルで地域と交流する活動が多いです。熊本市現代美術館は、自分のアートプロジェクトの経験値を一番活かせるステージだと思っています。

当然、美術館の根幹である展示というのは学芸員とともにやっていきますが、やはり美術館館長として、熊本だけではなく、美術館の有り様、今後の美術館の役割を全国の美術館に発信していきたいと思っています。熊本市現代美術館、熊本市美術文化振興財団、熊本市が一緒になって、社会的な課題を美術がどう取り組んでいくのかということを提案し、実践し、検証していくことが、熊本市現代美術館と取り組むモチベーションになっています。それは東京藝術大学や岐阜県美術館とはまた違う役割であり、熊本市現代美術館で得た経験を、県や国に活かしていきたいと思っています。熊本市現代美術館は、一番生活に近いフィールドだと思っているので、アートプロジェクトと同じようなことを一番取り組んでいきたいと思います。

2007年の展覧会「日比野克彦 HIGO BY HIBINO」（2007-08）のときは、商店街や伝統工芸の方々など、民間との付き合いが強かったですが、2021年に館長に就任してからは、熊本市役所へ「御用聞き」*に行ったりするなど、ステークホルダーを結ぶ仲間が少し違っているかなと思います。

2007年から2021年の間には、地震や新型コロナウイルスの流行があり、アートの役割が、(変わってきたというよりは)本来の意味に気づきはじめてたところがあります。2021年6月に開催した体験型シンポジウム「災害時のアートインフラを考える」（東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト×熊本市現代美術館）のように、ライフラインとしてのアートの活動を行政がしっかりフォローしていく必要があります。いわゆる文化活動ではなく、生きていくうえでアートはとても重要なインフラなんだと、行政に言えるタイミングだと思います。「やっぱりそうだよ」と。ガス、水道、電気、食料といった衣食住だけではなく、やはり文化と接するということが、生きていくという力をより強くします。いっつき、そういうものを失ったりした経験があるからこそ気づくことがあると思います。

インフラとしてのアートを、熊本市現代美術館の設置者である熊本市が、しっかり意識的に取り組んでいく。熊本市現代美術館は、現代美術館として現代に機能するアートの役割を提案していくことがやるべきだと思っています。

*熊本市役所に出向きアートが行政課題の解決に役立つ可能性を考え話し合うプロジェクト